

ifm electronic



ビジョン
哲学
基本方針





ビジョン 哲学 基本方針

常に我々を導き、結びつける
考え方、見通し、基本方針

第9版
© Copyright 2012
by ifm electronic gmbh,
Friedrichstraße 1, 45128 Essen (ドイツ)
無断転載、無断複写を禁ず

本書の全部または一部の複製、
ならびにいかなる形のコピーにも、
ifm electronic 社の文書による許諾が必要です。

目次

挨拶

1 将来へのビジョン

まえおき	130
機械化とオートメーション化の歴史と発展	131
将来のポジティブな発展のための前提	133
将来へのビジョン	134

2 ifm 社の哲学

社員	146
顧客と市場	148
製品	149
期待と結論	150

3 経営の基本方針

会社	154
社員	161
企業イメージ	168

社員の皆さん

ifm社の経営者は2007年に、1990年に作成されてから変更されずにきた企業哲学をいくつかの点において手直ししました。

その多くにおいては、私たちは現実に応じたものとなるように手直ししています。例えば以前の企業哲学においては、当社の代理店 — 例えばオランダの VEGA 社やオーストリアの Kühnel 社 — との協力関係を続けていきたいことに言及されていましたが、この2社の売却によりこの協力関係はもう存在しなくなっています。

また、例えば、私たちが「市場」の項目で行った変更についても同様のことが言えます。この点に関して1990年の企業哲学においては、アジアにおける市場を日本だけに限定していました。これは1990年時点では、確かに正しいことでありましたが、今ではこの考え方も時代遅れとなりました。ifm社はアジア全体で大規模な投資を行い、アジアの各地で新しい市場を構築しており、今後も構築していくつもりでいるからです。

当社の基本方針や哲学はもちろん変更されることなく生きています。2007年におけるifm社の経営者としてここで明らかにしておきたいのは、この永年存在してきた、そして1990年からは文書化もされ、このたび最新版として新たにまとめられたこの基本方針を、これまで通り私たちも支持するということです。

この基本方針は私たちが行動する際の確固とした柱であり、これまで通りifm社の社員やifmのパートナーの誰もが確実にこれに沿って行動できるものです。

多くの企業においては、企業哲学や企業方針をそのつど経営者に合わせようという努力がなされていますが、ifm社ではそのような戦略は決してとらないつもりでいます。企業哲学や企業方針というものは、長期にわたって支持される活きた思想であり、経営者の交代の際に簡単にやめられるものではありません。これは企業の精神なのです！

この短い序文の中で示しておきたいのは、私たちもifm社のビジョン、企業哲学、基本方針を尊重し模範となっていくつもりであること、そして同時に、全ての社員に対してこれらの規律を遵守してもらうよう求めたいということです。

この意味において、私たち全員にとって実り多き時が今後も長く続くことを願います。

2007年 エッセン市、テトナング市

ifm electronic gmbh

Your management



Martin Buck



Michael Marhofer

社員の皆さん

ifm社の経営者はその考え方、将来への見通し及び経営方針を次の3つの章にまとめました。

－ 将来へのビジョン

－ ifm社の哲学

－ 経営の基本方針

これらの章の内容はifm社及びその社員とともに価値観や行動（あり方）において長い年月をかけて作られてゆくものです。

私たちの考え方を皆さんに明確にするためにまず最初に2、3の説明を述べます。

ビジョン：

20年、30年後に世界がどうなっているか、またどのような必要条件を私たちの会社と社員が満たしていなければならないか、という問いに誰も客観的に答えを出すことはできません。

しかしながら、私たち全員にとって非常に興味のあることでもあります。私たちの多くがその頃もまだ仕事に就いており、どんなチャンスがあるか、またどのような生活の安定性が期待できるのかを知りたいと考えているでしょう。

また、20年、30年の間に就職する子供を持っている人もいます。その子供たちにも教育の中で早い時期に各自の方向を認識させてゆくことが重要です。

そして、私たちは全員将来に対して社会的、経済的、そして生態学の上からも共同の責任があります。その将来について正しく予測することは、私たちが現在の行動から導かれる結果をはっきりと認識し、問題の解決策や新しい道を早期に探求してゆくことが出来てはじめて可能となります。

ifm社の経営者は、将来世界がどう展開してゆくかについて様々な方向から考えてみました。

1. ifm社の発展は私たちを囲む周りの世界の展開に直接左右されます。
2. チャンスを手に入れるには、チャンスがどこにあり得るのかを思い描かなければなりません。
3. 将来を描いてみる試みは、ifm社にとっての危険要素を察知し、危険から防ぐことに役立ちます。
4. 優秀な企業であることは、私たちが将来への対応を他の企業よりもより適格に準備できてのみ可能となります。
5. 社員と経営者の共通の（共通でなければ少なくとも全員が知っている）、会社のあらゆる将来についての構想があることは、この両者にとって重要です。

以上のような私たちのビジョンの数々をまとめたものを皆さんに読んでいただきますが、皆さんもこのことについて良く勉強して下さい。

私たちのビジョンは多くの仮定に基いたものであり、証明出来ない推論によるものを含んでいますので、読む人が個人的に信じるかどうか、という問題になってくることも承知しています。

しかし強調して申し上げたいのは、ここで私たちや皆さんがの中で描かれた将来で良いかとか、そのような将来に生きたいかということが問題ではありません。

また、政治構造の将来的展開や社会問題の除去について考えることも（これは非常に大事であり、関心の高いところですが）、ここでは課題としていません。

ここでの目的は、将来に関する多くの情報をまとめ、評価し、様々な専門家が出した結論と私たちの独自の創造力や過去30年間にみられた技術開発に基く経験を比較することにあります。

そこから出た結果は私たちの環境にとって素晴らしい展開の可能性を示しており、それによってifm社にどんな課題が課せられるか、そしてその課題には企業に（言葉を代えれば、私たち社員全

員に）かかってくるチャレンジやチャンスがはっきりと見えてきます。

「私たちのビジョン」の土台となったこれまでの機械化オートメーション化の歴史について顧みれば「テクニクユートピア」の一部は既に実現されていることが分かるでしょう。

哲学 と 経営の基本方針：

「哲学」では商売の柱石（社員と顧客／市場と製品）に対する基本的な考え方をまとめました。

私たちの商売はifm社設立当初よりこの考え方に基いて行われてきました。そして将来においても私たちや全社員にこの考え方が義務づけられてゆかなくてはなりません。

「経営者の基本方針」では、私たちは毎日これを基準に自分と照らし合わせて、企業として、また社員の一人一人が私たちを取り巻く世界との接触の中で自分自身を認識してゆくための規範（規定）を制定しました。

「哲学」、「経営の基本方針」ともに意識してこれまで築かれた社風と私たちの希望が込められています。

今日のifm社が私たちの要求の全てを満たしていないことは明らかです。しかし、私たちは明確な目標を持っており、多くの忍耐と適切な権限、そして皆さんの協力を得ながら「哲学」と「経営の基本方針」を実現させるよう努力します。

この3つの章「ビジョン」「哲学」「経営の基本方針」を読み、よく検討することによって将来の動向を考えるだけでなく、私たちがifm社とその社員の永続的な、そしてポジティブな発展を強く確信していることを少しでも感じ取って頂きたいと願っています。

ifm electronic gmbh

Your management



Robert Buck



Gerd Marhofer



Bernhard von Spiczak



1 将来へのビジョン

まえおき

文化的社会のオートメーション化をはかるシステム伝送や制御技術を提供することは、ifm社に与えられた企業任務である。

この任務に数世代に渡って会社は従事し、これはまた約6千年来人類と共にある課題でもある。

技術進歩や技術革命は我々の任務と密接に関連する概念である。人類は技術の助けをかり、最初は大枠でしか想像や理解が出来なかった未来へと踏み込んでゆく。各個人の生計を立てている仕事を軽減するためにはなくてはならなくなった技術が既に数多くある。

“将来”は今日の観点からは夢のような可能性をもたらしていくだろう。この文書は、その夢のような将来をよりよく理解し信じることをより簡単にするものである。

歴史上の発展、そして我々の今日の知識から一つの展望を導き出し、それは何故この会社が成功し拡大していく大きな可能性があるかを示している。ifm社は社員全員にいつの時もここで提示されている可能性に基づいて約束された安心感を与えたいのである。

機械化と オートメーション化の 歴史と発展

もし我々の祖先が約6千年の昔、技術の開発を
始めなかったとしたら、今日の全ての企業はあ
り得なかっただろう。

約6千年前、シュメール人が車輪を発明した。

この革命的な発明によって、今日に至るまで
絶えず技術開発が展開し、一つ、また一つとこ
の車輪の新しい使い道の可能性が見つけ出され
た。

まず最初は、荷物を楽に早く運ぶことを目的
に車輪を利用することで車が生まれた。（この
発明は、確かにオートメーション化・合理化の
分野に入るものである。そして、その時代にお
いて運び人夫や牛馬、その所有者は必要なくなり、
失業と飢えをもたらした。）

その後、技術開発・改良という点から観れば
車輪そのものは大きく変わることなく無数のもの
がつけられた。

例えば、自動車に関して言えば、モーターの
各部分に始まり、力の伝達に使われる歯車や動
輪、及び駆動ベルト、ギヤの歯車リム、そして
目に見える四つの車輪にいたるまで多くの要素
がこの発明を基礎としている。ハンドルもこの
発明によるものである。

初期には、紡ぎ車、陶ろくろ、水車、巻き上
げ機等が出てきた。理論と実際の使用方法を結
びつけた最初の技術者は、イタリア人のレオナル
ド・ダ・ヴィンチ（1452～1519年）であ

る。レオナルド・ダ・ヴィンチはいろいろな分
野の中で技術者として最も良く知られている。彼
は、戦争時に使われる多種多様な機械の他にも工
具機械、パワーシャベル、潜水器など、その他多
くのものを設計した。

18世紀のイギリス産業革命の始まりまで、さ
らに技術開発に拍車がかかった。産業革命は、農
業社会から産業社会への移行を導き、同時に社会
構成も変えてしまった。

1734年には既に最初の自動織り機がつ
くられた。電気駆動のはた織り機が出るのに
1879年までかかった。

19世紀の初めには既に農業の分野で部分的に
自動機械を使って仕事が行なわれた。

20世紀末には、我々は工場の自動化（FA）や
事務所の自動化（OA）について考えている訳で
ある。言葉通りのソリューションという意味では
まだ遠いところに我々はいるが、それへの可能性
は手の届くところにあり解決できるものになっ
ていくだろう。

技術の発展は社会の多様な変化をも、もたら
す。

一つ一つの技術的な発展の時期といわゆる文化
の区切りとは同時性、関連性がある。そして、新
しい文化の時代を越えた後には、多くの場合、そ
の技術的な発展のあった分野で働いている人達の
間に大きな問題、失業や困窮をもたらしてきた。

拒絶運動（後にはストライキという形で）や機械そして工場が破壊される等の惨事その結果として起ったこともあったが、これによって技術的開発が滞ることはなかった。

そして、変動期のショックを克服した後は、いずれの時もポジティブな社会構造の変化をもたらして来た。

新しい職業が生まれ、以前より安価に物を生産できるようになり、その結果、消費拡大を導き、国民生産性や生活レベルが上がった。技術的な可能性を、絶えず限りなく追求して来たことによって、貧困を無くし、大量失業を取除くことができた訳である。もっともこれは後世になってはじめて認められたものであった。

そして現在私達は100年前に比べるとその半分の時間しか働いておらず、社会保障を享受し、もうほとんど満された生活水準を保っている。

そしてこの段階まで来て出てくる疑問は、将来においてもこのように順調に行くように力を入れて働かなくてもいいのだろうか？安心しきっていいのだろうか？いろいろなところで我々の幸せな暮らしの中に危険が待ち伏せてはいないのだろうか？ということである。

怠惰・無頓着又は思い上りから、いつの日か他の国がもっと安く物を生産し、もっと良い品質の物を提供し、そして技術的にもよく、広範囲に使用できる製品を市場に持ち込み、私達の

商品が売れなくなってしまったとしたら、社会的な問題が再び沸きおこり、私達がたてた将来の見通しなど消し飛んでしまうだろう。だからこそ、今日既に、技術分野を含んだ新しい向上策を立てていかなければならないのである。

このためには新しい技術を無視することはできない。これらは私達の経済及びifm社にもさらにチャンスをもたらし、新しい多様な可能性をひらく要素である。

過去30年の研究開発に従事して得た知識をもって、人類はまた一つ文化の区切りをのり越え、また一つ新しい発展段階に入る時期に来ている。

将来のポジティブな 発展のための前提

ifm社は、その設立そして今日までの発展と成功は、たゆまない技術開発や、経営者と社員の想像力により達成できたと考えている。

技術開発に伴い絶えず新しい職業が生まれ古い職業が消えていった。同じように新しい企業が設立されても、もし新しい発展に対し常に目を向け関心を持っていないければ、時代遅れの製品と古い組織しか持たない会社は市場から姿を消していく。

ifm社もその一例である。

電子センサーがリミットスイッチにとって代ったことがifm社に成功をもたらした。

しかし、もしもifm社がセンサー技術やオートメーション化に全く別のソリューションを求められる将来を想像できなければ、そしてその将来へ向けて適切に研究開発をして、準備していかなければ、いつの日か市場ニーズをより正確にとらえた製品を持つ会社にその市場を譲り渡し、退いていかなければならなくなるだろう。

将来における成功もifm社には可能である。なぜなら人間は今後ももっと毎日の仕事を自動化してゆくだろうから。生産工程は、機械そして自動機に急速に置き換えられていくだろう。その次には、インテリジェント装置が構想され、オートメーション生産工程を人間の手が全く触れることなく自動的に監視し稼動する。

人類は今日までずっと続いている教育を通し人類に残された課題・任務を果す能力をつけていこう。

問題を把握し、次に来る市場のニーズ、要求、要望に対し絶えず考えをほりめぐらすこと、また、技術開発について慎重に、かつ、緻密な討議によって、ifm社とその社員は、将来に対し他の誰よりも良く準備し、リスクを避けることができるだろう。ifm社の仕事の範囲はこれまでも、今現在そして将来においても次の様に定義される。

情報やデータを

- 収集する
- 伝達、通信する
- 整理し、組み変え、比較できる様にまとめる
- 計画された目標値と比較する
- 修正のために必要な命令を出す
- 先に述べた課題を遂行する

将来へのビジョン

私達のビジョンは、今日数多く見られる軍事衝突や社会緊張が将来世界を混沌とした状態にしていくという見地からは発想していない。逆に長期的には、政治・経済における国際協力や世界平和の維持、そして地球に住む全ての人の利益と幸せを守る為に相互に寛容で助け合う時代がくると信じており、それを想定している。

そこでは、人類が今日かかえる課題は技術的解決で実行するのに必要な社会的な条件がさらに発展しているだろう。さらに突き進んだ技術的解決策を見つけるとい人類が持つ任務は過去においても、また未来においても避けることはできない。

この「技術的解決」とは、将来非常に数多くの分野を包括し、それぞれの過程がコンピューターによってのみ操作されながら自動的に流れていくような複合的なものになるであろう。

それは、次の様になるだろう：

いわゆるオペレーションレベルといわれるコンピューター界の第一段階では、センサーによる情報の取込み、取込まれた情報を判断するための評価分析、既にインプットされている目標値との比較、そして目標値達成のための修正指示の出力が行われる。目標値に達した時は上層の技術レベルへ実行命令が出される。ここまではifm社のパンフレットに書かれている。これより先は下記のように展開するだろう。

ディスポジション（処理）レベルといわれる第二段階では、数多くの末端のオペレーション端末が与えられた既存のデータや情報によって調整されている。

そして、ディスポジションコンピューターはさらに、第三段階では、専門家の知識の全てが入力され人間が全く手を加えることなく独自に必要な判断を下す知的戦略コンピューターの下に組み込まれている。

このような又はこれと似たような方法で（今日既に具体的に想像できるものとなっている）生産工程だけではなく、他の数多くの工程過程を革新することができる。

それには、乗り物や飛行機の自動操縦、医療技術における自動診察や診断、広範囲に変化する情報通信技術、経営管理、倉庫管理やその他多くの分野におけるさらに進んだオートメーション化が列挙できるだろう。

このような前提で、人類はそのポジティブな将来を手に入れるだろう。そして技術の分野においては、すばらしい未来が期待できる。

多くの専門家が遠くない将来、地球人口は150億になるとみなしている。この予測に合せて我々の考えや将来の展望を広げてみよう。

この予想される数の人間が混乱を引き起こさないよう準備されなくてはならない。

ifm社は我々の世界を（技術的な意味からだけでなく）価値あるものにする手助けをした。その際には会社と社員の発展の為に多くのチャンスが出てくるだろう。

150億の人間は

- 途方もない量のエネルギーを必要とする。
- 誰も餓死をすることないよう、農業や食品産業が発展していかなければならない。
- 需要を満たす産業を興していき、またそこでは、資源の取り過ぎを防ぐ策（リサイクリング等）が取られていかなければならない。
- 人間や貨物を確実安全にしかも速く輸送する交通システムを持つようになる。
- 最良な医療によって、高年齢に至るまで健康でいられるようになる。
- 住む価値のある環境を私たちが残すことを期待している。

もし、これらの課題に対し、技術的な解決の処置が取られていかないとしたら、人類は自分の存在自体に疑問を持つだろう。

- つまり食料不足から餓死していくのである。（あらゆることがこれまでと同様に進んで行き、人口が急激に増加し、産業製品や食料生産に急速に拍車がかかると、資源

不足となり、産業そして後には全世界の経済が崩壊していくだろう。）

- 又、地球汚染からも人間は餓死の道を歩む。（たとえ十分な資源に恵まれたとしても、ブレーキのきかなくなった産業の成長とゴミ処理問題の未解決が地球を破壊し、野山を汚染するだろう。その結果、食料供給は不可能になっていく。）
- 又、全世界にまたがる核戦争が一回起これば人類は絶滅する。
（人類の愚かさから、共通の目的を持ち、共同で成果をあげることにはつながらず、ささいな利益や生き残る場所をめぐる競争のようないさかいを引き起こしてしまうだろう。）

長期的な視野を持つ計画を怠ることによって地球の将来を悲劇的な結果に導いてしまうことになる。またそれは確実に実績の高い企業でいたいと考える会社にも同様にいえることである。

生きる価値があり、機能する世の中を維持していく可能性や方法はまだ存在している。高度に発達した経済はその将来を自ら決定していく上で現在ある方法に依存するのではなく、その決定が正しくあるためにも自ら新しい方法や条件をみいだして行くべきなのである。

大きな発見の時代は過ぎた。ノーベル賞受賞

者Sir McFarlane Burnetによれば、全ての重要な基本的となる発見のほとんどがなされてしまった。そして今、人間の発明精神に残された課題は、数々の発見から得た知識をフルに活用しながら現在ある技術システムを改良し、又、新しいシステムを人間が利用できるように普及させていくことである。

150億の人間は

生きていく上で、膨大なエネルギーと電気を必要とする。しかし、エネルギー確保は産業が申し分なく機能し条件を満たすことができ初めて可能となる。

数多いエネルギー確保の可能な方法の中から二つのプロジェクトが実施可能であり、また十分な結果が得られると判断された。

その一つは宇宙空間に太陽のエネルギーを吸収する鏡を設置すること、そして二つ目は、海洋に人口島としてしっかりつなぎ留めて浮かばせた核融合反応炉からエネルギーを確保することである。二つ目のプロジェクトでは無制限に存在する海水が理想的な高エネルギー燃料として、そしてまた同時に必要に応じて冷却材として利用される。

必ずや、時代を追って、他の可能性も検討されるようになるだろう。そして、石炭や石油のような今日のエネルギー源は問題とされなくなるだろう。これらの古い資源の蓄えには限りがある。

ある。燃焼する際さまざまな有害物質を発生させ、さらには地球が息をするのに必要不可欠な酸素を消費してしまうからである。

ifm 社の課題

1. エネルギー産業全体の情報の分析と評価
2. エネルギー産業の分野毎の分類及び各分野の需要の明確化
3. ifm 社の企業方針への包括的な判断と勧告

150億の人間は

獲得したエネルギーで自給自足でき、満腹になることができる状態になるだろう。

今日、分かっているところでは人間一人当りの供給には0.9ヘクタールの耕地が要る。地球には総計32億ヘクタールの平地しかなく、何故多くの人が今日既に餓死していくのかが、計算から明らかになる。この状況は変えられなければならない、またそれは実現できるものである。未来の食料供給は、食料の農業工場を作っていくことにより可能となり、供給問題も解決されるだろう。

農民は食料化学者となるであろう。これは多くの問題を含んだ巨大な出発点である。一万年の間続いた農業を変えていくのは決してやさしくない、がしかしそれをするによって一つの生き残る可能性をつかむことができるのである。

150億人の人々が良質の食料を十分な量確保するためには地球上で現在生産されている6倍の量

が必要となる。

旧式の農業でこれを満たすことは出来ないであろう。従来の農業では、この世の中から餓死する人を無くすことは不可能であろう。

従来の方法を新しい耕地方法で補い、新しい方法へ切り換えていく。野外の畑から新しい様式の農業工場内の人工光に満ちたホールへの移行は既に開始されている。この地球のいかなる場所でも、耕地がなくとも食料を生産できるだろう。そして収穫は年間を通しいつでも行なわれる。

食料の供給には巨大な産業が必要である。その産業は食料の原料の一部を農業工場から賄う。残りを化学やバイオケミカル（生化学）の工程を経て原料を生産する化学分野から調達することになる。

次の世紀の初めには、世界の食料需要のうち50%が既に合成によってつくられるだろう。

ifm 社の課題

1. 自動化された家畜場から最新の農業機械や農業工場に至るまでの農業の合理化、オートメーション化についてのあらゆる情報の分析及び評価
2. 農業工場から人工的な食料の生産にわたる新しい様式の食料生産に関する現場の視察と評価
3. 農業産業の分野毎の分類及び分野毎の需要

の明確化

4. ifm 社の企業方針へ包括的な判断と勧告
5. 農業産業による環境汚染を防止し又、環境保護を促進していく製品の考案と提供

150 億の人間は

ただ生きるだけではなく自ら生計を立てていきたいと願う。

技術文明は、もはや簡単には止められないし、また止めるべきではない。とてつもなく大きな車輪を動かしてしまったと言える。発生した技術産業は毎日の生活に必要なあらゆる製品を人間に供給し、またさらにはいわゆる個人の生活スタイルに必要な多くのぜいたく品をも提供している。新聞から衛星放送、自転車から自動車、鉄道、飛行機、宇宙船、歯ブラシから摩天楼に至るまでその全てを数えるとおそらく図書館がいくつも必要であろう。

ただ一つははっきりと言えることは、その素晴らしいアイデアで一つの資源を探し、見つけ出し、製品を作り上げ、何百万個も売り、物資があふれて使い捨てにしている人類が忘れたことは、まもなく資源の底がつかうということである。そうなった時新しい製品はもう作れなくなり、使い捨ての社会から絶滅の社会が生まれるのである。

そして今この悪循環にどこかで歯止めをかけるべき時期に来ており、既に再利用による生産

への道の第一歩が踏み出されている。

産業文明のスクラップを片づけるのは自然界で行なわれているように自然な循環の下でなされなければならない。自然の中で木が育ち死に朽ちて、それによって新しく育っていく木が必要とする養分を得られるように、文明の中でも再利用産業が存在すべきなのである。世界総人口が150億となった時には生産される物資の種類は今日の需要の数倍となり、それによりいわゆるリサイクル産業はものすごい成長を遂げるであろう。

より多くの、そしてより新式の技術の助けを借りこの問題を解決していくことが出来るはずであり、また解決しなければならぬ。

つまり、もし産業化の進んだ国々でスクラップ製品を再利用していけば現在まだある資源で非産業国と増加する人類を賄うことができると、今日既に確認されているのである。

具体的な例を挙げるならば、ドイツだけでも年間4億m³（約800～1000kg/m³）のゴミが出る。

ifm 社の課題

1. 既存のメーカーや処理産業とのより一層の協力関係の強化
2. 技術的な環境保護の分野で業界界のパートナーや外部の研究機関との長期共同作業計画を立案し導入

3. 産業廃棄物の再利用及び処理やリサイクル産業についてのあらゆる情報の分析及び評価
4. この産業の分野別分類と各分野の需要の明確化
5. ifm 社の企業方針への包括的判断と勧告

150 億の人間は

行動範囲を広げるだろう。

将来想像できないくらい多くなる交通量にもかかわらず人間や物資の輸送がより確実により速く行われ、そして特に環境維持を考慮した交通システムを築かなければならない。

我々が進もうとしている世界は今日の世界とは比べものにならないものであろう。そこには貧富はまだ存在するが、世界人口150億の世界では、貧しくてもその生活はあらゆる技術がいろいろな形で利用され、またあらゆる社会的な保証が付いた生活となるであろう。

このことを前提に考えると個人のレベルでは将来二人に一人が前へ進む乗り物（例えば今日では自動車）を持つようになっていくだろう。

つまりこの地球上に75億の個人の乗り物が存在することになる。未来の世界においても個人の交通が今日と同じ価値を持つと考え、個人の乗り物以外にも人や貨物を輸送する為の他の輸送方法も必要となるだろう。

そして全ての乗り物に共通していることは環

境を汚染しないものであることだ。空の旅は時速数千kmまでの速度を有する地上又は地下の輸送手段にとって代えられるであろう。今日実現出来そうな解決策では、しだいに磁気浮上方式の輸送機関に絞られつつある。

大陸と大陸との間の輸送はおそらく前述の超高速度で大陸間をつなぐ大きな管道（チューブ）を使い可能となるであろう。（管道内が真空になれば物理的に可能である。）

1,000kmまでの距離は、大きな都市を結ぶための地方道がそれらの都市の外側にはりめぐらされるろう。

都市の外域は道路又は地下を走る磁気浮上方式鉄道によって結ばれるであろう。

このような高速の輸送手段によって、多くの人が可能な限り短時間に支障なく移動することが保障される。

都市の中では個人個人の交通方法が最も有意義な手段となるであろう。その一つにやはり磁気浮上方式の手段が最も適している。利用者は各自の目的地をプログラミングすれば自動的にそこへ運ばれるというしくみである。

また大きな建物やショッピングセンター街では、エレベータや長い移動には様々な速度を持ち、座席も携えた歩く歩道がつくられるだろう。

従来の遠距離の個々の交通は150億人の世代にも行われるが、人口集中地域のはずれた地点

から始まることになるだろう。

都市内部への交通の駅には大きな駐車場がつけられ、個人の乗り物はそこに駐車され、そこから先は電子交通案内システムを利用するようになるであろう。

行き先、速度、観光のためによる滞在やまわり道等々を前もってプログラミングすることができ、地上での安全な旅行が可能となる。

このような交通手段によって、自然の中で余暇を持つことも、また人間と自然とのつながりも維持していくことができる。

貨物の輸送も同じように考えられる。大きな都市は地下に輸送システムが引かれ、各建物が個別に物資の供給をうけることができるようになるだろう。

物資は地下の到着階からさらにエレベータで仕分けされていくのである。物資は建物全体の細部にわたって自動的に配送される。

ifm社の課題

1. 人や貨物の交通輸送システムにおけるあらゆる情報の分析及び評価
2. 分野によって分類して各分野における需要の明確化
3. ifm社の方針・方向に対する包括的判断及び勧告

ifm社の課題はここに記された発展の可能性と同様に多様である。特に人間と貨物のための交通・輸送システムはifm社の最も重要な開発分野の一つでもある。

自動車、電車といった乗り物自体の中でも、またこれら乗り物を製造する上でも、そして磁気浮上方式鉄道のルートなどの交通路でも想像できないくらい数多くの様々なセンサーが使用されねばならなくなる。

これらのセンサーの定義及び開発は今丁度始まったばかりである。

ifmはこの点に広く関与していくつもりである。

150億の人間は

この地球及び社会が提供できる可能性を健全で最良の形で体験したいと望む。

未来社会の人間は高年齢に達しても健康でいる。病気による長患いはもはやなくなっていくだろう。そして生命の終りは未来でも修復することの出来ない身体の一部や身体機能の損失によって訪れることになるだろう。

大きな伝染病もこの世から姿を消すだろう。損失した身体の一部を移植や人工的に刺激して再生させることによって限りない代用品が見つげ出されるのは言うまでもない。健全な体調で長く生きられることが人生に生きる価値を与えるようになる。これは全て化学、バイオケミカ

ル、バイオテクニクそしてマイクロテクニクの分野における研究・開発によって実現できるものである。

そして技術は人間の健康維持に重要な役割を果たしている。というのも技術なしには生命を維持したり病気を診断し治療することは不可能であるからだ。

電子式心臓搏動計がなく診断を確実に裏付けることができなければ、例えば患者が訴える腹痛が簡単な薬で治せるものなのか、又は心臓障害や他の痛みの原因によるものかどうかの判断に今日の医師は多いに迷うであろう。

病気の診断、治療選択、選択した治療の適切性の裏付け、そして申し分のない手術執行やその監視等に使用されている高度な技術機器はもはや医療の場からははずすことはできない。

世界人口150億の世代には、身体の健康を保障できるようになる為には、医療のあらゆる分野において技術的な補助機器の完成がその基本的条件である。

ifm社の課題

1. 医療の分野における分析、診断、治療、手術補助のための技術補助機器について、あらゆる情報の分析と評価
2. 産業とそのニーズの明確化
3. ifm社の企業方針方向に対する包括的な判断及び勧告

150億の人間は

汚染のない酸素が充分にあり、生きる価値のある地球を引き継いでくれることを我々に望んでいる。

しかしながら人類は、これまでこんなにも不注意に地球を扱ってきたせいで、過去のあやまちを正し、また元通りにするために将来へ向けて必死に取り組んでいかなければならない。あらゆる経過を絶えず監視し、自動的に即時対処することで新しく起る環境破壊や惨事は回避されるであろう。

UNO（国連）による数字によれば、産業化の開始以来およそ150種の鳥及び脊椎動物が絶滅した。そして他方では約1,000種の生き物が絶滅の危機にさらされ、約250,000種の植物が死に絶えようとしている。我々が呼吸している大気は汚染され、このままだと汚染され続けていく。ドイツだけでも年間2千万トンもの、ほこり、すす、排気ガスを大気圏へはき出し、80万台のトラックが一杯になるゴミを排出している。

我々の食物が育つ土地には薬物、毒がすでに染み込み、今も染み込み続けている。殺虫剤、ふっ化塩素炭化水素（スプレー缶ガス）、ふっ素、ふっ化水素、二酸化硫黄、一酸化炭素、ほこりの中の重金属、その他多くの毒物が家庭や交通手段、農業や工業から世界中で放出されているのである。

我々に食料を提供してきた水も酸や毒で汚染され、海の幸の一部は既に口にすることが出来なくなったし、河川はほとんど全て、そして海洋の一部も生物学的には死んだ川・死んだ海と化している。

空腹の他に人は渇きも癒さなければならない。水は生活の最重要必需品として、その使い方は絶えず注意を払わなければならない。

しかし、なんと軽はずみな使い方を人類はしていることか。ゴミの排出が水をよごし、汚染する始まりである。塩素系炭化水素（家庭や工場で多種多様に使用される炭素、水素及び塩素を含む有機化合物）、重金属、酸、リン酸塩、産業用及び家庭用の漂白剤が地下水層にしみ込んでいるのである。

ドイツの浄水場には例えば年間4,400万㎡の泥が入ってきてその大半は農業で使用される。ここでは重金属と塩素系炭化水素が耕地を通し、地下水へ運ばれるという小難を除こうとしてかえって大難を招く結果になっている。

また、化学・放射線及び機械製造産業によって自然界へもたらされた毒物の威力はものすごく、早急に国際レベルの法令の取決めを行い、この気違い沙汰を禁じる策を講じなければならない事態となっている。

20世紀の生活がもたらしたこれら全てのネガティブな付随状況は取り返しがつかなくなる前

にとり除かれなければならない。その第一歩、手初めは今日紛れもなく踏み出されており、問題の把握や秩序の回復にはとてつもない努力と骨折りが強いられるが、我々の地球人口が150億の世代になった時には今日と比べれば、きれいで住む価値のある地球であることの確信を我々に与えてくれる。

大地と海洋と大気も、エネルギー生産や産業同様行き渡った自動監視装置によって絶えず指定されたデータ通りに維持されているか監視されるようになるだろう。そこでは今日においてはまだ想像もつかないくらい多くのセンサーが環境破壊を回避するために全ての測定値を常時とらえ、評価・比較し必要な処置を指示していくだろう。

限界値の設定には、産業や農業の必要条件よりも自然界のもつそれが重点的に考慮されるであろう。そして地域毎及び全国のデータが無線技術又はオンラインシステムにより直通でセンサーへ集計され、管理、統計評価及びファイルされていく。これに伴ない環境保護という新しい職業が発生し、直接処置判断を下せるような権限を持つだろう。

ifm社の課題

ifm社は企業という立場そして一般的な社会責任という点からも、きれいで酸素の充分ある健全な世界の達成、維持を目的とした技術開発に

貢献したいと願い、そして貢献していくつもりである。

以上、我々のビジョンはまだ想像できる時間の枠内で地球の生存条件についてほんの少しばかりの提案をしたにすぎないかもしれない。

世界総人口が150億になるには数十年しかかからず、しかし、我々の希望的観測の大半が実現されず、また理想的な解決策への地ならしも終わっていないかもしれない。

これを読まれた多くの人はまだこの世に生きているだろう。だからこそ我々が一緒になってこの世の中を生きる価値のあるものにし、健全な状態で後世へ引き継ぐという目的に向って働くことができると考えるのである。

我々は連帯責任があるのだ。

生きる価値のある世界の実現への役割分担はひとつには大きく個人のレベルに依存する。各個人が責任意識をより大きく持ち、環境問題へより高い配慮をすることが望まれる。

そして次の役割分担としては「まえおき」で述べたifm社の企業としての課題任務を通し、ともに150億人口の世代への貢献をすることができるのであろう。

割当てられたifm社内における企業任務を遂行し、人間社会及び職場に対し責任感をしっかり持つことが我々の課題である。

そして、ifm社と共に安定した成長を歩むとい

う我々の共通のチャンスが認識でき、長期に渡って我々への励ましとなる。

理想を持つことによってほとんど全ての人類の進歩が始まってきた。

未来へ向けてのアイデアはそれが実現される

前にはまず妄想扱いされることが多かった。

そこで我々のビジョンをDavid Ben Gurionの次の言葉でしめよう。

「理想郷を信じない者は、非現実な者である。」



2

ifm社の哲学

社員

我々は社員の方々に基本的な方向性を提示し、長期的な会社の姿勢の基礎となる価値観を明らかにしたい。

哲学という言葉を用いたのは社員、顧客そして製品に対する会社の考え方をはっきりさせる上でその考慮、思想の多様性を意味するものである。

我々は社員自体がこの企業の最大の資産であると確固たる確信を持っている。社員というポテンシャルは、またifm社の業績力を意味し、成功又は不成功を決定するものである。

社員と会社は共に会社の成功に関心を持たなければならない。というのも不成功は、社員にとって給与の削減に始まり、失業を意味し、会社にとっては負債のかかえ込みに始って、致命的な倒産という事態を意味するからである。

だから、会社の社員に対する関係の持ち方または社員の会社に対するそれはオープンであり誠実なものであるべきで、それにより掲げられた目標を共同で達成することができるのである。

互いに強い信頼を持ちパートナーとしての自覚を持った協力関係には定期研修が必須であり、また同様に目的達成への勤勉で組織的な仕事分担、そして自発的な誠実で無条件の責任意識が不可欠である。これらが調ってのみ、会社は責任の分担及び権限の委譲を実現できる。(これは長期的に必ず必要となり、努力しなけ

ればならない。)

ifm社は決定権を持つ者を多くかかえることになる。会社の経営者のみが成功を決定づける訳ではない。これは会社の繁栄に対しほんの一握りの人が責任をもつのではなく、社員の一人一人がその責任を負うことを意味する。

大きな成功というものは社員が会社を信じ、またフェアーにそして誠意をもって扱われていると知ってはじめて達成できるものである。

そうすることによって各自が責任を引受け、正直に又勤勉に最良の実績をもたらすことが可能となるだろう。

各自が責任を持ち、相互協力が無しにはやっていけないことが分かれば人々は互いに配慮しあうようになるだろう。上司への態度はその地位からではなく、その人の実績から尊敬のあるものとなる。もしこの逆であったとしたらその尊敬も長くは続かない。

このような関係は社員にとっても会社にとっても努力のしがいがあるはずである。

- あらゆる状況においてもお互いに協力し働く。対抗意識を持つことのないように。
- お互いにオープンにつきあう。不誠実だったり、躊躇することなしに。
- 我々の共通の目標に向かって努力する。多くの異なった目標ではなしに。
- 他の者を助けて、邪魔にすることはしない。

成功を維持させるには他の方法はない。意義のある方法で成功することが、社員と会社に安定と満足感を与えるのである。そのような会社

には存続の危機感など湧くことはないだろう。安定と満足感を与えるのである。そのような会社には存続の危機感など湧くことはないだろう。

顧客と市場

社員はある面で顧客と市場との間の仲介者であり、ifm社も他の面でその仲介者である。顧客は独自にまた我々の社員と協力して自分の仕事を解決するために新しい需要を展開していく。

もしifm社が特別な需要に対する製品を提供すれば、その製品は特別な顧客には売れても限られたマーケットになってしまう。また、個々の顧客が比較的高い価格で特別な製品の供給を受けることになる。

しかしながら、ifm社の目指すところは世界で大きな市場を持つ、又は持つと見込める製品を開発し提供していくことである。これは大量生産を可能にし高品質の維持、そして、顧客に安価で高品質の製品を提供することが出来るからである。これを基本にユーザー仕様の製品を手掛け提供すべきである。

ifm社員は世界中で顧客との間に、顧客の関心事(利益)をオープンにまた誠実に考慮できるように密接な関係のもとに信頼関係を築いていかなければならない。

そうして長年に渡る取引関係が保証されていくのである。

顧客は我々の持つ専門知識、経験そして我々の高い品質の製品とその用途についての知識から、利を得、その見返りにifm社はユーザーから注文を受けるのである。

悪い製品を新しい用途に試してみようとする顧客はいない。同様に、顧客へ対する徹底した個人的な働きかけをなくして新しいマーケットは発生しないのである。だから顧客はその重要性において社員と同等である。すなわち製品が大変興味深く、技術的にもよく研究されたものであっても、顧客がなければマーケットはなく、マーケットがなければ企業は成り立たないのである。

社員は各自(直接顧客とコンタクトのある者も、また開発、製造、管理その他の職場で直接接することのない者も)ifm社の製品に大きな市場を作りそれを維持するためにあらゆることをするという責任がある。もちろん我々は大きな市場に出される製品によって個々のユーザの需要を引き出すことを忘れてたり、おろそかにしてはいけない。ここにもifm社の為の新しい市場がある。

製品

市場獲得の基本的前提は製品の提供である。提供できる製品なしには顧客に声をかけることもできなければニーズに応えることもできず結果として市場は存在しない。

競争力のある商品を持たない企業は成り立っていかない。ifm社の商品は文化的な社会へむけたオートメーション化の為にセンサー、システム伝送及び制御技術と定義されている。ifm社の全製品は最先端の知識と可能性に依って研究・開発されている。製品は広い市場に出されるときの長時間の監視と最悪条件での試験によって、製品の性能と品質の裏付けがなされている。

工場ではまず試作品がつくられ、最小ロットで製品化され、適切な試験設備と製造機材が開発され、ifm社の製品品質が維持されるよう自動製造機械が設計され、調整されるという準備を経る。そして少量のロットで同一のifm社製品品質になるよう試みられる。

設定された全ての条件が満たされて初めて大量ロットの製造を開始する。

製品の均一な品質維持は資材の仕入れという点からも同様に保証されている。使用される全ての部品及びコンポーネントはここでは一定の基準に達したものが調達されており、品質基準が維持されているが絶えず検査され、製造に十分な個数や量が揃えられている。

品質維持は主に納入業者の正しい選択とその業者で品質基準が守られているかどうかのチェックによる。

このような広範囲の手順が非常に完成度の高い製品を生み、ifm社の顧客が安心して使い、また将来においても期待出来るものとなる。

これらのことは我々の顧客が我々の製品から受ける保証を通し、開拓してきた市場を維持する助けとなる。

ifm社の製品はその品質と性能において模範的でなければならない。

期待と結論

成功は会社も社員も企業哲学をもとに話しを進め、お互いに期待を実行に変えてゆくことよってのみ生まれる。

ifm社とは会社や企業を意味しない。ifmは単なる名前ではない。

ifmは我々全員を意味するのである。

我々は同じ方向にある同じ目標を追っていかなければならない。

しかしこの会社の理想に到達するのは我々が精力的に楽観的に、また権威主義的な考えやおごりを持つことなく、はっきりしたモットーの元に仕事にあたってのみできることである。

そのモットーとは

“I can do it !” である。

このモットーの意味するところは

- － 社員一人一人がこの経営哲学が意味するところの自発的なイニシアティブをとること
- － 社員一人一人がこの経営哲学が意味するところの共に考え、また先を読むこと
- － 社員一人一人がこの経営哲学が意味するところの各自の仕事の意義を知り、精力的で積極的な姿勢で従事すること
- － 社員の一人一人がこの経営哲学が意味するところの人を助ける準備ができており、この姿勢を他の者に伝えること
- － そして最後に、社員の一人一人がこの経営哲学の実現への責任を負う覚悟を持つこと



3

経営の基本方針

3 経営の基本方針

会社及び社員の行動と 指導のための指針

会 社	154
会社の任務	154
市 場	155
技 術	156
資 本	158
宣 伝	159
生き残ること	160
社 員	161
幹部と指導	164
組 織	166
企業イメージ	168

会 社

ifm社は絶えずその創立精神に忠実であること。

ifm社は他に類のない製品品質、サービス、そして信頼を提供したいと考える。

言ったことは行なう。

ifm社は世界を共通の市場と考える国際的な会社でありたい。

我々は安定性を維持しつつ、業績を伸ばし拡大していきたいと考える。

会社の任務

ifm社は世界のあるゆる市場でセンサーや制御機器、技術サービスを提供する事によって、技術過程の最適化やソリューションに取り組む。

ifm社は独立した自己責任のある、シンプルな集団を創り、それを維持してゆくことで、その成功を見出だす。

ifm社は市場や顧客によって方向を定める。市場はどんな経営理論よりも優れた答えを与えてくれる。

市場

物事を決して一面から捉えてはいけない。低価格でも品質、サービスが伴わなければ、採算のとれない品質、サービスと同じくらい悪い。しかし特別なユーザー問題の場合は、常に特別な手だての用意をもってこれにあたる。

ifm社は世界的視野を持つ企業である。そして我々の活動、投資の重点はアメリカ、アジア及びヨーロッパにおかれる。その他の市場のチャンスももちろん除外するものではない。

ifm社は現在ある需要のみではなく、新しい使い方や用途の可能性を説明することによって、目的とする需要の発掘をも目指したい。

ifm社はアメリカにおける販売活動の為に支店と自社の社員の最良な構成の模索をしている。支店への忠誠は独自の販売網の前進的な構築とその強化と同様に重要なものである。

アジアではifm社は一貫して拡大を企る。市場の特殊性から独自の製品の用意や競争力のある価格に大変な努力を強いられている。しかしifm社はこれらの要求を受けてたつだろう。

ifm社はヨーロッパにおいて、ドイツの支店と地域営業所から構成される営業システムを各国の国情から来る特別な要望を充分配慮しながら同様に組織していく。

技 術

ifm社は顧客に対する特別な考え方を持っている。そしてこの考え方を全社員に（どの部門に従事していても関係なく）はっきり知ってもらうことに絶えず努力している。社員は一人一人が全員直接的又は間接的な営業員なのである。

ifm社は当然行うべき顧客へのサービスを積極的に行う。

ifm社は、技術及び営業部門の社員に対して絶えず厳しい研修を実施し、顧客のニーズの増大や、しばしば変わるニーズに対して対応できる準備をしていく。そして市場の変化に対してフレキシブルで改革的な対応を可能にする。

ifm社は技術的に可能であり、かつそのノウハウで実現可能とみえる製品分野のみにおいて活動する。

提供する製品は原則的に世界中で販売できるものとする。

技術面で臨機応変であり、かつ革新的な企業という評価を獲得、維持していきたいと考える。

研究、開発のために絶えず費やされる高い経費はそこから生まれる高い成果と合いまって、競争社会に対するテクノロジーの面での優位性の確保、そして市場におけるポジションの強化に結びついていかなければならない。

・

効率的に高い品質レベルで効果的な製造が出来るようにするため、フィルム技術やモジュール技術のような自社の製造技術への投資は将来も促進される。

・

CPU及び他の部門とネットワーク化されている工場活動はフレキシブルに、最良の品質を保たねばならない。

・

製品品質が高いこと、そして技術データが真実であることはifm社の神聖で侵すことのできない価値である。

・

品質は外から命令されて確保できるものではない。ifm社の製品はパーフェクトなものでしかあるべきでないというプライドが全社員の考えに定着しなければならない。

・

我々の考えでは品質とコストの関係は矛盾するのではなくて、お互いに補い合い、お互いに促進するものでなくてはならない。

資 本

フレキシブルな資材調達にはフレキシブルな生産の前提である。しかし無駄を無くすことが資材調達の基本課題である。

ifm社は原則的に直接、軍事又は兵器技術の目的に使われる製品の開発しなければ製造、販売も行なわない。

我々はifm哲学の方向に合わせた基礎研究が必要としており、これは外部の研究所、大学や産業企業の手と共同研究を企画してより進んだノウハウを獲得することを目指す。

ifm社の製品開発は長期的に使える戦略によるものである。それから外れる短期的な市場の傾向や競争メーカーの開発に左右され考えもなしに、また自社のマーケティングコンセプトもなしに競争メーカー品をまねて作ってはならない。

ifm社は会社の規模に合った自己資本による基盤をもとに安定した、完全な非依存の組織となりたいと考える。

利益は会社の経営には切り離すことのできない報酬である。

利益が増大することは安定した成長の必要条件である。

宣 伝

利益は経営者によりそのまま会社に残され、会社の資金需要をカバーするのに必要な基金として調達される。

収益の増大は経費削減よりも良い可能性がある。

社員一人一人の働きがifm社の成功を大きくも小さくもする。社員一人一人が会社の利益に関し共同責任があるのである。

ifm社の宣伝は正直なものでなければならない。そして明確で、表現豊かで、革新的で、良い意味で攻撃的であり、かつ質の高いものであるべきである。

宣伝によってifm社という会社とその製品やサービスが他と混同されない唯一のイメージを持つように築かれていかなければならない。

ifm identicom 及びifmグループに属する全ての関係会社は会社のイメージアップを促進する活動に共同で積極的に取り組んでいく義務をもつものとする。

この協力関係は、宣伝において各国独自の特殊性に対する許容度と、各国の形体や品質レベルに対するifm identicomの中心的責任を尊重することに基づいている。

生き残ること

成長する会社は良好な業績を納めていくにはリスクのあることもしていかねばならない。しかし、経営者及び責任者は通常の経営範囲内にあり、ifm社の規模に妥当であると判断されるリスクのみをおかしていく。

•

競争市場において絶え間ない争いなくして安定も得られない。ifm社はこの休む時のない戦いをする覚悟である。

•

経営者及び責任者は世界中の市場景気の浮き沈みや様々な分野の展開に柔軟に対応できるよう製品の提供、顧客の多様性や大きさ、そして分野の多様化においてifm社の組織構造をできるだけ強固なものにするための多大な努力をしていく考えている。

•

経営者及び責任者は過去の経験を将来の実現に役立てていかなければいけない責任を自覚している。

社 員

我々はお互いに尊敬を持って接する。

•

全社員は人間的な関与を大事にし、ifm社はこの基本的姿勢を義務として感じている。

•

社員のやる気は目標を置くことにより起る。目標が魅力的で達成可能であればそれはやる気への原動力として機能するが、目標が達成不可能な距離にあればその機能を失う。

•

社員一人一人が新しい効果のあるアイデアの泉である。ifm社は危険性があっても支援し、失敗に終わることがあっても了承する体制をもって新しいアイデアを実際に使えるようにトライすることを促進していきたい。

•

ifm社は自主性のある社員を望む。その自主性は規律に根ざす。その規律とは我々の共通の基本的考えを受け入れ、我々の行動範囲の外枠を形成するルールを尊重することを意味する。

ifm社のルールはポジティブな内容をかかえるものである。ルールは社員に制限を与えるものではなく、社員が行動範囲を理解し、また利用できるように促すものである。

•

社員は各自の態度を通し、世界中へifm社のポジティブで他の会社と混同され得ない会社のイメージを伝える“使節”となる。

•

ifm社はマルチインターナショナルな幹部と社員を持っており、各国の異なった生活様式や文化を認めている。

•

ifm社は若い人に確かな興味あるすばらしい仕事を提供する目的を持って彼らを育てている。

•

ifm社は社員と長期的な付き合いを望んでおり、企業内での仕事上の向上の為のその能力と意識を期待している。

ifm社は全ての社員に安定した職場を提供する。ifm社は、景気動向によって一時的な現象として現れる雇用変動を職場の犠牲にすることによってではなく、自社の利益を減少させることによって乗り越える。しかしこれは何があっても職場を保証するという意味ではない。企業内での間違った構造発展や市場の長期的な変化があった場合は、企業経営者はifm社全体の安定のために、それがたとえ職場の減少であったとしても、適時に防止策を講じる。

•

自信ある指導は広い情報に基づいている。ifm社の幹部と社員は、情報を得る権利がある。しかし、自らも情報を与える努力をする義務がある。

幹部と指導

ifm幹部はその個人的な振る舞いを通し全社員の模範となっている。

•

ifm幹部は批判的であるが、自己批判も強い。

•

ifm社は包括的な情報や建設的な意見の取りかわしを通し、会社の管理職、経営幹部そして社員間に本当の意味の、そして機能していく信頼関係を築いていきたいと考える。

•

幹部はアイデアを明らかにし、特に社員の興味を起こさせなければならない。

•

幹部には未来学も少し必要である。

•

人は皆、認めてもらうことや賛辞が必要である。それは社員、幹部にかわりない。

•

社員の好意は時々はあがなうことが出来るが、自発的なものでなければあまり価値があるものではない。

ifm幹部は大きな責任の仕事を部下にどんどん与えるつもりでいる。任務の委譲は信頼と責任の自覚を生み、また部下の成長を促進する。

・

ifm幹部はそのような責任ある仕事を他の者に与えることによって自分の地位が危なくなるとは考えず、自らの新しい挑戦が出来るようになったと考える。

・

幹部と社員はお互いに約束事は守り、定めた期間は尊重する。

・

和をもって共に働くということは経営者、幹部、社員に当然のことである。討論の中で実際面での問題解決のために建設的な争いをして、私情を混えて人を傷つけるような争いはしてはならない。

・

幹部であっても社員であってもifm社の中で誰も権利だけを持っている者はいない。我々一人一人が各自の義務をもっと自覚しなければならない。

組 織

ifm社の社員は各自、自己批判し、また定期的に目には見えないが共通の基準で評価・判断される。その結果は比較され各社員とオープンに話し合われ、その社員の育成のための基盤として使われる。

•

定期研修はすべての企業範囲にて幹部及び社員を育成、訓練し、支援するものでなければならない。

•

ifm社は他の人を認め尊敬することを通し、持続性のあるシンプルで、しかしきちんと機能する組織を作っている。

•

組織は社員に役立つ補助的な存在で、数の少ない、重要な基本ルールと明確な責任を示している。

•

我々にとって組織とは “官僚主義との戦い” を意味する。

組織は簡素化がはかられ、また会社の各部門間の複雑な接点を少なくするものでなければならない。

•

ifm社では集中化と分散化の両方が正当性を持つものである。

•

組織によって社員の特別な知識情報、そして経験が集結されていかなければならない。つまり組織の構成においては柔軟に動ける状態にすることを意味する。

•

組織は組織のために存在してはならない。組織は社員の仕事に役立ち、また仕事を助長する手段であり、そうあり続ける。

企業イメージ

ifm社は会社が集中的かつ活発な企業文化を持つことを促進し、維持していきたい。

ifm社は社員の行動と会社のあり方について、その独特な他に類のないスタイルを通し、この経営の基本方針が誰にも明確に把握されることを望む。

我々は品質、製品、顧客に対する前述の価値観が確固不動のものとなることを望む。
全社社員がそれをある意味で義務として、しかし妥協なしに受け入れ、行動の基盤として絶えず頭にもっていて欲しい。

ifm社の営業員達はよい聞き手である。彼らは人前に立った時の態度やその外見同様、その熱心さと力の入れ方によってifmイメージをしっかりと外部に与えていくのである。

ifm社は環境問題を意識した決定や行為を要望し促進していく。

ifm社はそれぞれの国民の約束ごとを寛大に扱う。

ifm社は道徳的な企業でありたいと考える。

